

研究・調査プロジェクト報告

現代教化学部部門〈葬儀PT教理部門〉

日蓮宗における葬送儀礼の意味

嘱託 研究員 古河良啓、吉木祥介
鈴木隆泰、坂輪宣政、成田東吾

1. インド仏教と日本仏教の差違の要因①

日本仏教は、葬祭儀礼と一体化して発展・存続してきた（碑文谷「二〇一七」）。そのため、日本仏教を指しての「葬式仏教」という呼称も提唱され（圭室「一九六三」）、そしてこの呼称は幾分なりとも侮蔑の意味を含む用法へと転じていた（Wikipedia）。最近の研究により、葬式仏教としての日本仏教の価値が見なおされてきているものの（松尾「二〇一一」、鈴木「二〇一三」）、日本の伝統教団は〈インド伝来の仏教〉と「日本の葬式仏教」との差違を埋めるべく、様々な取り組みを行ってきた。浄土宗総合研究所による『葬祭仏教』（一九九七）と、曹洞宗総合研究センターによる『葬祭』（二〇〇三）は、その代表例といえるだろう。

〈インド伝来の仏教〉と「日本の葬式仏教」との差違を生み出している要因は、主に以下の二点に求めることができる。

①インド仏教では出家者が在家者の葬儀に携わらなかったこと

② インド人と日本人との間にある死生観（他界観）の違い

要因①については鈴木「二〇一三」が詳しく論じている。インドでは葬儀をはじめとする通過儀礼を完備した集団は、凝集力ある実体としてひとつのカーストを形成するようになる。ところが仏教という宗教は、血統主義ではなく行為主義に立脚しているため、生まれながらの差別の観念を強く有するカースト制度の受け容れを拒絶し、「仏教カースト」を形成することを拒否した。必然的に「仏教式の葬祭儀礼」はインドでは一般化することなく、「インド仏教では出家者が在家者の葬儀に携わらない」という状況が生み出されたのである。そして、このことがインドで仏教が滅びることになった最大の原因ともなっていた。人生における最終にして最大の通過儀礼である葬式を執行できない仏教は、インド人の願いにトータルには応えることができなかった。古今東西、人々の切実な願い（呻き）に応えられない宗教者、宗教集団が生き残れた例はない。インド仏教もその例外ではなく、その主流派（メインストリーム）の命脈は、十三世紀初頭のムスリム勢力の軍事侵攻によって絶たれてしまい、復活することも適わなかったのである。

2. インド仏教と日本仏教の差違の要因②

インド人の死生観（他界観）の根本は「輪廻転生（サンサーラ）」である。何らかの輪廻主体（アートマンなど）は、意思作用を持つ生命体（衆生。サットヴァ）が死ぬとその身体より脱出し（これが「死」）、別の身体へと入る（これが「生」）。輪廻するステージは上から順に「天（デーヴァ）、人（マヌシユヤ）、阿修羅（アスラ）、畜生（ティルヤグヨーニ）、餓鬼（プレータ）、地獄（ナラカ）」の六つであり、それぞれのステージはさらに細かく分化されている。人が他世界の浄土（仏国土。ブツダクシエートラ）に往生する際にも、浄土に往き輪廻転生するのである。たとえば、阿弥陀仏（アミターバ、アミターユス）の住まうとされる極楽浄土（スカークヴァティー）に往生する際には、

人は全員男性に生まれ変わるとされる。

一方、日本人の代表的な他界観として、「山中他界観」が挙げられる（柳田「一九六九」）。それによると、人が亡くなると魂がこの世界にある山へと赴き、そこで子孫から供養を受けることで浄化・強化される。そして浄化・強化されるなかで山を上昇していき、祖先神となり、最終的には子孫一族を守り、豊穡をもたらす氏神（村の鎮守）になるといふ。故人の魂には生前の個性が性別も含めて反映されており、インドに見られるような「別人格への輪廻転生」という観念は存在しない。

このように、インド仏教の教学レベルの他界観と、日本における民俗レベルの他界観の間には隔絶の距離があり、片方の立場に立つてもう片方の立場を包摂することは、不可能といつてよい。だからこそ、

近世の仏教ないし寺院は「葬祭仏教」となって墮落したという論者が多いが、私にいわせればそれは当たっていない。「日本仏教」をインド仏教をみるのと同じ目でみるから、また經典や教学を基準として日本の仏教を整理しようとするから、日本の仏教は仏教でなくなってしまう。しかし、日本の仏教は庶民信仰として民衆のなかに生きている。庶民の内面的な要請によって「日本仏教」は形成されたのである。それはインド仏教でも教義仏教でもない、括弧つきの「日本仏教」なのである。（伊藤・藤井「一九九七・五」）

しかし、葬祭の発展は宗旨、教学そのものの発展ではないことに注目しておく必要があります。葬祭は本来が民俗信仰です。それを仏教が取り上げ、仏教的世界観の上に儀礼を作り上げていったのですが、それだけに葬祭は文化の問題として捉えられるべきで、教学の視座からのみで解決しようとしても無理なのです。（曹洞宗「二

というように、日本仏教を仏教の教学レベルで包摂し理解することを放棄せざるを得ないとの指摘もなされてきた。翻つて本宗を見るに、インド人の他界観を前提とする『法華経』のみに基づく場合、本宗の葬祭の問題を説明しきることは、他の宗派と同様に困難である。一方、開祖日蓮聖人の教学に基づく場合、他の宗派とは異なり、葬祭の問題に踏み込んで言及することが可能となる。それは、日蓮聖人の他界観が日本人のそれに沿うものであること、そして他世界の浄土への往生でなく、この世界にある浄土への往詣まがひを説いているという、主に二点に求めることができよう。

3. 日蓮聖人遺文に見る日本人の他界観

本節では『昭和定本日蓮聖人遺文』の第一巻と第二巻に依りながら（「真蹟現存・曾存」に限定）、御遺文中に見える日蓮聖人の他界観を確認していく。

問云見華嚴・方等・般若・阿含・觀經等諸經勸兜率・西方・十方淨土。其上法華經文亦勸兜率・西方・十方淨土。何違此等文但勸此瓦礫荆棘之穢土乎。

答曰爾前淨土久遠実成釈迦如来所現淨土実皆穢土也。法華經亦方便・寿量二品也。至寿量品定実淨土時此土即定淨土了。但至兜率・安養・十方難者不改爾前名目於此土付兜率・安養等名。

例如此經雖有三乘名不有三乘。不須更指觀經等也。積意是也。法華經無結縁衆生当世願西方淨土楽瓦礫土是也。

不信法華經衆生誠無分添淨土者也。（『守護国家論』一二九頁）

されば日蓮は日本第一の法華經の行者也。もしさきにた、せ給はば、梵天・帝釈・四大天王・閻魔王等にも

申させ給へし、日本第一の法華經の行者日蓮房の弟子也、となのらせ給へ。よもはうしん（芳心）なき事は候はじ。

但一度は念仏一度は法華經となへつ、二心ましまし、人の聞にはばかりなんどだにも候はば、よも日蓮が弟子と申とも御用ゐ候はじ。後にうらみさせ給な。但又法華經は今生のいのりともなり候なれば、もしやとしていきさせ給候はば、あはれとくとく見参して、みづから申ひらかばや。（『南条兵衛七郎殿御書』三二七頁）

各々は法華經一部づつあそばして候へば、我身並びに父母兄弟存亡等に廻向しましたし候らん。（『五人土牢御書』五〇六頁）

我並我弟子諸難ありとも疑心なくわ自然に仏界にいたるべし。天の加護なき事を疑はざれ。現世の安穩ならざる事をなげかざれ。我弟子朝夕教しかども疑ををこして皆すてけん。つたなき者ならひは約束せし事をまことの時わするゝなるべし。妻子を不便とをもうゆへ、現身にわかれん事をなげくらん。多生曠劫にしたしみし妻子には心とはなれしか。仏道のためにはなれしか。いつ（何時）も同わかれなるべし。我法華經の信心をやぶらずして、靈山にまいりて返てみちびけかし。（『開目抄』六〇四頁）

万事期靈山浄土。（『富木殿御返事』六一九頁）

今本時娑婆世界離三災出四劫常住浄土。仏既過去不滅未來不生。所化以同体。此即己心三千具足三種世間也。

（『観心本尊抄』七二二頁）

人死すれば魂去、其身に鬼神入替て亡子孫。餓鬼といふは我をくらふといふ是也。智者あつて法華経を讚歎して骨の魂となせば、死人の身は人身、心は法身。生身得忍といへる法門是也。華嚴・方等・般若の円をさとれる智者は死人の骨を生身得忍と成す。涅槃経に身雖人身心同仏心いへる是也。生身得忍の現証は純陀也。法華を悟れる智者死骨を供養せば生身即法身。是を即身といふ。さりぬる魂を取返して死骨に入れて彼魂を変て仏意と成す。成仏是也。（『木絵二像開眼之事』七九三頁）

今法蓮上人も又如此。教主釈尊の御功德御身に入かはらせ給ぬ。法蓮上人の御身は過去聖霊の御容貌を残しおかれたるなり。たとへば種の苗となり、華の菓となるが如し。其華は落て菓はあり、種はかくれて苗は現に見ゆ。法蓮上人の御功德は過去聖霊の御財なり。松さかふれば柏よろこぶ。芝かるれば蘭なく。情なき草木すら如此。何況情あらんをや。又父子の契をや。（『法蓮鈔』九四五頁）

彼諷誦云 從慈父閉眼之朝至于第十三年之忌辰於釈迦如来之御前自奉誦自我偈一卷回向聖霊等〔云云〕。
（『法蓮鈔』九四五頁）

さて最後には、日蓮今夜頸切て靈山浄土へまいりてあらん時は、まづ天照太神・正八幡こそ起請を用ぬかみに候けれど、さしきりて教主釈尊に申上候はんずるぞ。（『種種御振舞御書』九六五頁）

人に魂なければ死人也。日蓮は日本の人の魂也。（『種種御振舞御書』九七五頁）

故聖靈は法華經に命をすててをはしき。わづかの身命をさ、えしところを、法華經のゆへにめされしは命をすつるにあらずや。彼の雪山童子の半偈のために身をすて、薬王菩薩の臂をやり給は、彼聖人なり、火に水を入がごとし。此凡夫なり、紙を火に入がごとし。

此をもつて案に、聖靈は此功德あり。大月輪の中か、大日輪の中か、天鏡をもつて妻子の身を浮て、十二時に御らんあるらん。設妻子は凡夫なれば此をみずきかず。譬へば耳しるたる者の雷の声をきかず、目つぶれたる者の日輪を見ざるがごとし。御疑あるべからず。定て御まほりとならせ給らん。其上さこそ御わたりあるらめ。

〔妙一尼御前御消息〕一〇〇〇頁)

しかるに尼ごせん並に入道殿は彼の国に有時は人めををそれて夜中に食ををくり、或時は国のせめをもはばかず、身にもかわらんとせし人々なり。さればつらかりし国なれども、そりたるかみ(髪)をうしろへひかれ、すゝむあし(足)もかへりしぞかし。いかなる過去のえん(縁)にてやありけん、をほつかなかりしに、又いつしかこれまでさしも大事なるわが夫を御つかい(使)にてつかわされて候。ゆめか、まぼろしか、尼ごせん御すがたをばみまいらせ候はねども、心をばこれにとこそをほへ候へ。日蓮こい(恋)しくをはせば、常に出る日、ゆうべにいづる月ををがませ給。いつとなく日月にかけをうかぶる身なり。又後生には靈山浄土にまいりあひまいらせん。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。〔国府尼御前御書〕一〇六三頁)

重故留之。事々期靈山。恐々謹言。(『大学三郎殿御書』一〇八三頁)

入道殿は今生にはいたく法華經を御信用ありとは見候はねども、過去の宿習のゆへかのもよをしによりて、こ

のなが病にしづみ、日々夜々に道心ひまなし。今生につくりをかせ給し小罪はすでにきへ候ぬらん。謗法の大悪は又法華經に歸しぬるゆへにきへさせ給べし。ただいまに靈山にまいらせ給なば、日いでて十方をみるがごとくうれしく、とくしに（死）ぬるものかなと、うちよろこび給候はんずらん。中有の道にいかなる事もいできたり候はば、日蓮がでし（弟子）也となのらせ給へ。わずかの日本国なれども、さがみ（相模）殿のうちのもの申をば、さうなくおそるる事候。日蓮は日本第一のふたう（不当）の法師。ただし法華經を信候事は、一閻浮提第一の聖人也。其名は十方の浄土にきこえぬ。定天地もしりぬらん。日蓮が弟子となのらせ給はば、いかなる悪鬼等なりとも、よもしらぬよしは申さじとおぼすべし。〔妙心尼御前御返事〕一一〇三頁〕

尊靈御菩提無疑者歟。適時而已等釈此意歟。〔尊靈御菩提御書〕一一一九頁〕

今の御心ざしみ候へば、故なんでうどのはただ子なれば、いとをしとわをほしめしけるらめども、かく法華經をもて我がけうやうをすべしとはよもをほしたらじ。たとひつみありて、いかなるところにをはすとも、この御けうやうの心ざしをば、えんまほうわう（閻魔法皇）ぼんでん（梵天）たひしやく（帝釈）までもしろしめしぬらん。釈迦仏・法華經も、いかでかすてさせ給べき。かのちごのち、のなわ（繩）をときしと、この御心ざしかれにたがわず。これはなみだをもちてかきて候なり。〔南条殿御返事〕一一七六頁〕

これはひとへに父母の恩・師匠の恩・三宝の恩・国恩をほう（報）ぜんがために、身をやぶり、命をすつれども、破れざればさてこそ候へ。又賢人の習、三度国をいさむるに用ずば、山林にまじわれということは、定るれい（例）なり。此功德は定て上三宝、下梵天・帝釈・日月までもしろしめしぬらん。父母も故道善房の聖靈も扶

り給らん。(『報恩抄』一三三九頁)

されば花は根にかへり、真味は土にとどまる。此功德は故道善房の聖霊の御身にあつまるべし。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。(『報恩抄』一四九頁)

さどの国より此甲州まで入道の来たりしかば、あらふしぎやとをもひしに、又今年来てな(菜) つみ、水くみ、たきぎこり。だん(檀) 王の阿志仙人につかへしがごとくして一月に及ぬる不思議さよ。ふで(筆) をもちてつくしがたし。これひとへに又尼ぎみの御功德なるべし。又御本尊一ふくかきてまいらせ候。靈山浄土にてはかならずゆきあひたてまつるべし。恐恐謹言。(『是日尼御書』一四九頁)

しかれば故聖霊、最後臨終に南無妙法蓮華經ととなへさせ給しかば、一生乃至無始の悪業変じて仏の種となり給。煩惱即菩提、生死即涅槃、即身成仏と申法門なり。かゝる人の縁の夫妻にならせ給へば又女人成仏も疑なかるべし。(『妙法尼御前御返事』一五三七頁)

しかるに日蓮はうけがたくして人身をうけ、値がたくして仏法に値奉る。一切の仏法の中に法華經に値まいらせて候。其恩徳ををもへば父母の恩・国主の恩・一切衆生の恩なり。父母の恩の中に慈父をば天に譬へ、悲母をば大地に譬へたり。いづれもわけがたし。其中悲母の大恩ことにほうじがたし。此を報ぜんともうに外典の三墳・五典・孝経等によて報ぜんともへば、現在をやしなくて後生をたすけがたし。身をやしない魂をたすけず。

(『千日尼御前御返事』一五四二頁)

其上御消息云、尼が父の十三年は来八月十一日。又云ぜに一貫もん等云云。あまりの御心ざしの切に候へば、ありえて御はしますに随て法華經十巻をくりまいらせ候。日蓮がこいしくをはせん時は学乗房によませて御ちやうもんあるべし。此御経をしるしとして後生には御たづねあるべし。（『千日尼御前御返事』一五四頁）

日蓮が心は全く如来の使にはあらず、凡夫なる故也。但三類の大怨敵にあだまれて、二度の流難に値へば、如来の御使に似たり。心は三毒ふかく、一身凡夫にて候へども、口に南無妙法蓮華經と申ば如来の使に似たり。過去を尋れば不輕菩薩に似たり。現在をとぶらうに加刀杖瓦石にたがう事なし。未来は当詣道場疑なからん歟。これをやしなはせ給人々は豈同居浄土の人にあらずや。事多と申せどもとどめ候。心をもて計らせ給べし。（『四條金吾殿御返事』一六六頁）

されば故阿仏房の聖靈は今いづくむにかをはすらんと人は疑とも、法華經の明鏡をもつて其の影をうかべて候へば、靈鷲山の山の中に多宝仏の宝塔の内に、東むきにをはずと日蓮は見まいらせて候。若此事そらごとにて候わば、日蓮がひがめにては候はず、釈迦如来の世尊法久後要当説眞実の御舌と、多宝仏の妙法蓮華經皆是眞実の舌相と、四百万億那由他の国土にあさ（麻）のごとく、いね（稻）のごとく、星のごとく、竹のごとく、ぞくぞくとひまもなく列ゐてをはしまし、諸仏如来の、一仏もかけ給はず広長舌を大梵王宮に指し付てをはせし御舌ともの、くぢら（鯨）の死てくされたるのごとく、いわし（鯛）のよりあつまりてくされたるのごとく、皆一時にくちくされて、十方世界の諸仏如来大妄語の罪にとされて、寂光の浄土の金るりの大地はたとわれて、提婆がごとく無間大城にかはと入、法蓮香比丘尼がごとく身より大妄語の猛火ばといでて、実報華王の花のその（園）一時に灰燼の地となるべし。いかでかさる事は候べき。故阿仏房一人を寂光の浄土に入給はずば諸仏は大苦に墮

給べし。たゞをいて物を見よ物を見よ。仏のまことそら事は此にて見奉べし。〔『千日尼御返事』一七六一頁〕

さては、をとこははしら（柱）のごとし、女はなかわ（桁）のごとし。をとこは足のごとし、女人は身のごとし。をとこは羽のごとし、女はみ（身）のごとし。羽とみとべちべちになりなば、なにをmonteかとおべき。はしらたうれなばなかは地に墮なん。いへにをとこなければ人のたましゐなきのごとし。くうじ（公事）をばたれにかいゐあわせん。よき物をばたれにかやしなうべき。一日二日たがいしをだにもをぼつかなしとをいしに、こぞの三月の二十一日にわかれにしが、こぞもまちくらせどもみゆる事なし。今年もすでに七つき（月）になりぬ。たといわれこそ来らずとも、いかにをとづればなかるらん。ちりし花も又さきぬ。をちし菓も又なりぬ。春の風もかわらず、秋のけしきもこぞのごとし。いかにこの一事のみかわりゆきて、本のごとくなかるらむ。月は入て又いでぬ。雲はきへて又来る。この人の出で、かへらぬ事こそ天もうらめしく、地もなげかしく候へとこそをぼすらめ。

いそぎいそぎ法華経をらうれう（糧料）とたのみまいらせさせ給て、りやうぜん浄土へまいらせ給て、みまいらせ給べし。〔『千日尼御返事』一七六二頁〕

又子は財と申経文もはんべり。所以経文云其男女追修福有大光明照地獄令其父母發信心等云云。〔『千日尼御返事』一七六三頁〕

而に故阿仏聖靈は日本国北海の島のえびすのみ（身）なりしかども、後生ををそれて出家して後生を願しが、流人日蓮に値て法華経を持、去年の春仏になりぬ。戸陀山の野干は仏法に値て、生をいとひ死を願て帝釈と生た

り。阿仏上人は濁世の身を厭て仏になり給ぬ。其子藤九郎守綱は此の跡をつぎて一向法華經の行者となりて、去年は七月二日、父の舍利を頸に懸、一千里の山海を経て甲州波木井身延山に登て法華經の道場に此をおさめ、今年は又七月一日身延山に登て慈父のほかを拜見す。子にすぎたる財なし子にすぎたる財なし。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。〔千日尼御返事〕一七六五頁)

無量義經の四十余年の文は不動明王の劔索、愛染明王の弓箭也。故南條五郎殿の死出の山三途の河を越給時、煩惱の山賊・罪業の海賊を静めて、事故なく靈山浄土へ参らせ給べき御供の兵者は、無量義經の四十余年未顕真実の文ぞかし。〔上野殿母御前御返事(中陰書)〕一八一―二頁)

かゝるめでたき御經を故五郎殿は御信用ありて仏にならせ給て、今日は四十九日にならせ給へば、一切の諸仏靈山浄土に集せ給て、或は手にすへ、或は頂をなで、或はいただき、或は悦び、月の始て出たるが如く、花の始てさけるが如く、いかに愛しまいらせ給らん。〔上野殿母御前御返事(中陰書)〕一八一―三頁)

かゝるなさけなき国をばいといすてさせ給て、故五郎殿の御信用ありし法華經につかせ給て、常住不壞のりやう山浄土へとくまいらせさせ給へ。ち、はりやうぜんにまします。母は娑婆にとどまれり。二人の中間にをはします故五郎殿の心こそをもいやられてあわれにをばへ候へ。事多と申せどもとどめ候了。〔上野殿母御前御返事(中陰書)〕一八一―六頁)

而に光日尼御前はいかなる宿習にて法華經をば御信用ありけるぞ。又故弥四郎殿が信じて候しかば子勧めか。

此功德空しからざれば、子と俱に靈山浄土へ参り合せ給ん事、疑なかるべし。

烏龍と云し者は法華經を誘じて地獄に墮たりしかども、其子に遺龍と云し者、法華經を書いて供養せしかば、親仏に成、又妙莊嚴王は悪王なりしかども、御子の浄藏・浄眼に導れて、娑羅樹王仏と成らせ給。其故は子の肉は母の肉、母の骨は子の骨也。松榮れば柏悦ぶ。芝かるれば蘭なく、無情草木すら友の喜友の歎一なり。何況親と子との契り、胎内に宿して、九月を経て生落し、数年まで養ひき。彼にな(荷)はれ、彼にとぶら(弔)はれんと思しに、彼をとぶらふうらめしき、後如何があらんと思こゝろぐるしき、いかにせん、いかにせん。子を思金鳥は火の中に入にき。子を思し貧女は恒河に沈き。彼金鳥は今の弥勒菩薩也。彼河に沈し女人は大梵天王と生れ給。何況今の光日上人は子を思あまりに、法華經の行者と成給ふ。母と子と俱に靈山浄土へ参り給べし。其時御対面いかにうれしかるべき。いかにうれしかるべき。(『光日上人御返事』一八七九頁)

日蓮は所らう(勞)のゆへに人々の御文の御返事も申ず候つか、この事はあまりになげかしく候へば、ふでをとりて候ぞ。これもよもひさしくもこのよに候はじ。一定五郎殿にゆきあいぬとをほへ候。母よりさきにけさん(見参)し候わば、母のなげき申つたへ候はん。(『上野殿母尼御前御返事』一八九七頁)

4. まとめ

前節の引用箇所からも分かるように、日蓮聖人の他界観はインド伝来のそれとは異なり、日本人の他界観をほとんどそのまま反映している。その象徴として、死後に魂が赴く(往詣する)浄土がこの世にある靈山という山である点と、その際に往生という輪廻転生を経験しない点(鈴木「二〇一八」)、追善供養が可能な点などを挙げる事ができる。したがって本宗の場合、「日蓮宗としての葬祭仏教」を教義レベルで整備することが可能であると判断される。

これは本宗の大きな強みとなるであろう。

本宗における葬送儀礼の意味をまとめると、以下のようになる。

故人の魂を、この世にある浄土、靈山浄土（りょうぜんじょうど）へと導くこと。靈山浄土は『法華経』の第十六章「如来寿量品」に説かれており、釈尊や日蓮聖人、そしてわたしたちの先祖が住まう常住の浄土とされる。靈山浄土に赴く際は、故人の魂は輪廻転生を経験しないため、「往生（おうじょう）」ではなく「往詣（おうけい）」ということばを用い、「靈山往詣（りょうぜんおうけい）」と呼びならわしている。靈山往詣は、久遠実成本師釈迦牟尼仏の功徳を全て具足している題目（南無妙法蓮華経）の受持を通して実現される。

（参考文献）

伊藤唯真・藤井正雄（編）

「一九九七」『葬祭仏教―その歴史と現代的課題―』、東京：ノンブル社。

鈴木隆泰 「二〇一三」『葬式仏教正当論―仏典で実証する―』、東京：興山舎。

「二〇一八」『お題目で送るお葬式―「南無妙法蓮華経」のお葬式・その意味と功徳―』、東京：日蓮宗新聞社。

曹洞宗総合研究センター（編）

「二〇〇三」『葬祭―現代的意義と課題―』、東京：曹洞宗宗務庁。

圭室諦成 「一九六三」『葬式仏教』、東京：大法輪閣。

碑文谷創 「二〇一七」『四訂 葬儀概論』、東京：葬祭ディレクター技能審査協会。

松尾剛次 「二〇一七」『葬式仏教の誕生―中世の仏教革命―』、東京：平凡社。

柳田國男 「一九六九」『先祖の話』、東京：筑摩書房。

（参照URL）

葬式仏教、<https://ja.wikipedia.org/wiki/葬式仏教>（平成三十年十一月三日アクセス）